

大智禪師偈頌

鳳山山居

(その三)



一心の旅路

大智禪師山居の郷より

大智禪師偈頌

鳳山山居（その三）

名韁利鎖留不住

めいきょうりさ
名韁利鎖

留むれども 住（とど）まらず

晦跡煙霞水石中

かく
晦跡を晦す 煙霞水石の中

折脚鎗児煎野菜

しゃつきやくとうじ
折脚の鎗児 野菜を煎る

住山自効古人風

おのづか
住山自ら古人の風に効う

名韁利鎖 は名利（欲望）のきずな、くさりである。このような名利に住著せず。

蹤跡をくらまして、煙霞、水石中の人になる。これは隠遁者になることではない。この身心を仏法になげすてて、悟道得法までも望まぬ行人になることである。

折脚の鎗児は脚の折れた鍋である。人間のつくつたものは、そんなものである。とにかく身貧にして道貧ならず。法を重くし身を軽くし、名利を越えて三宝の願海に向向する、その崇高なる祖師の家風を志慕せられた大智禪師の心境を汲みとらなくてはなるまい。

いま聖護寺本堂の所謂の西の室中に、御開山大智禪師の尊像が奉安されている。かつての

東京美術学校教授であり当時、仏像彫刻の第一人者といわれた関野聖雲先生の秀作である。その由来記を拝見して、その勝縁に感激する外はない。

昭和十八年、当時の熊本県知事横溝光暉先生が、素道老師の熱意に感じ、自ら聖護寺再建奉讚会を組織してその会長となり、県の諸機関と相計つて聖護寺伽藍の建立に協力し、林道という名の参道をつくり、更に大智禅師尊像寄進の約束をされたのである。

時恰も太平洋戦争中、極めて困難なる諸条件を克服して聖雲先生に依頼された。聖雲先生もこれに応えて、大久保道舟先生（現永平寺西堂老師）とともに聖護寺を訪ねて現場の認識を深め、素道老師より直接大智禅師の高風を体得される等、周到なる用意の下に原型の製作に着手せられたのである。しかし戦局は苛烈になり、製作の過程に於て苦労せられた様子が、聖雲先生の中間報告の書翰によつても判断される。

昨年、横溝県知事閣下より鳳儀山聖護寺大智禅師の像御依頼により製作中数回の空襲により精神統一ならず止むなく郷里神奈川県に疎開いたし候（略）

戦中戦後の苦難、戦火をくぐつて懸命の努力で完成された尊像である。

しかも昭和二十二年十月二十二日、日展審査講評会講演中、聖雲先生は逝去されたという、

實に一代の名匠が命をかけて完成された尊像である。

そして、尊像を聖護寺にお迎えする迄には横溝先生の御苦心は申すまでもなく、関係各位の一方ならぬお骨折があつた訳で、結局、聖護寺御着は昭和二十三年五月二十五日であつたと記録されている。

いま此の等身大の素晴らしい御坐像を礼拝しながら、私は素道老師がどのような規模の堂宇を再建しようと計画されたのであろうかと思案し続けているのである。

電灯もガスも電話も、近代的な便利なものを一切遠ざけられ原始的な清淨境を願われた老師の遺志を継いで此処に新しく僧堂を建設しようとしている。

六百五十年の昔、菊池公が当寺の住職以下、大小公私のこと、武重が子々孫々ながく相継いのうべからず。開山上人の付法正伝の門弟、代々法灯を相続して弥勒下生みろくあのあ晨あしたに至る迄、断絶せしめざらん為なり。と寄進状にあるのは单なる土地寄進でなく、正伝の仏法が行持せられ、法灯の繼承を祈願する赤心のあらわれではないか。